

三戸地域の特産果実

ガマズミ収穫省力化を

関係者が試験 既存農機流用、手応え

三戸地域の特産果実「ガマズミ(シヨミ)」の生産拡大に向け、関係者が収穫作業の機械化に取り組んでいる。土を攪拌する既存の農機を流用し、枝から実を外す試験に成功。生産の実現に期待を込める。

(上條哲洋)

ガマズミの収穫は、たくさんの実が付いた小枝を、さみで切り取った後、金網に振りつけて枝から実を外す。専用の機械がなく、全て手作業で行う必要があるほか、同地域で広く栽培されるリンゴと収穫時期が重なることから、時間と人手の確保が困難だった。

特に金網で実を外す工程は微妙な手加減が求められる上、長い時間を要する作業で、生産者の負担が大きい。20年以上にわたり生産を続けている三戸町の片ルリ子さん(68)は「昼に収穫して、夜はずっと実を外す作業をすることになる。機械を使えば、手応えを得られる。別用途の農機だが、流用に手応えを得た。24日、三戸町の佐瀬本店



関係者が試験 既存農機流用、手応え

提案を受けた。10月、片さんが町の農業レベルアップ事業補助金を活用して1台を購入。24日には、ガマズミの加工事業を手がける佐瀬本店(同町)で試験稼働を行い、流用への手応えを得た。ただ、早く大量に枝と実を生産することが判明。佐瀬本店の佐藤雅之専務(64)は「適度な速さと量を知る必要がある。使い方をさらに研究していきたい」と力を込める。

試験稼働には、ガマズミの研究を続ける弘前大農学生命科学部食料資源学科の岩井邦久教授(60)も学生を

連れて来町し、立ち会った。岩井教授は「工夫次第でかなりの効率化を図れるのではないかと。一朝一夕とはいえないだろうが、生産者間で農機を共有、活用できる体制を構築してもらえた」とエールを送った。

この画像は、当該ページに限って”デーリー東北新聞社”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。